にらにゃん

消炭灰介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
にらにゃん

【Ｎコード】
Ｎ８０６３Ｐ

【作者名】
消炭灰介

【あらすじ】
木付奏間はクラス委員の天崎七月が犯罪者だということを知っている。
そして、犯罪の現場を押さえた奏間は七月に対して共犯を持ちかけ……。
猟奇的な愛情を抱く少女たちとの共犯生活を描く、新感覚？倒叙サスペンス！

祈り

初恋は十五の夏。年上の人だった。長い亜麻色の髪のおしとやかな外見とは裏腹に自由奔放で破天荒でとにかくめちゃくちゃな人。

どうやって知りあったとか、なんで好きになったかなんて忘れた。けど、その人を取り合って友人と喧嘩したのは覚えてる。青春というか、若気の至りというやつか、結構盛大にやらかした。そのせいで俺は右目の視力を失った。

たぶん、俺たちの卒業式の日のことだったと思う。彼女は唐突に姿を消した。だから、彼女が今、遠くにいるのか近くにいるのか、はたまた生きているのか死んでいるのかすら分からない。

何も告げずに去ってしまった彼女だが、一つだけ、遺していったものがある。

それは笑顔とか大切な時間とか青臭いものではなく、

――にらにゃん――

可愛らしい響きのそれが、こんなにも残酷だとは思わなかった。

それは俺が好きだったあの人が遺した悪魔の呪。

今の俺のすべてで。

俺のすべてを狂わせたすべて。

おいのり

むかしむかしあるところに、お姫さまがいました。
ある日、お姫さまは隣の国の王子さまに恋をしました。
それはそれは一途な恋だったそうで、
そしてそれはそれは燃えるような恋だったそうで。
それからお姫様は毎晩毎晩、毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩、
王子様のことを想いました。
けれど、お姫さまは知ってしまったのです。
自分が恋焦がれた王子さまには婚約者が、
自分とは別の人と結ばれる運命が用意されていたことに。
お姫さまは泣きませんでした。
それどころか、お姫さまは王子さまのことを想うことをやめませんでした。
来る日も来る日も、毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩、
毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩毎晩、
お姫さまは王子さまを想い続けました。
しかし、いや、やはり、ある日、お姫さまは気付いてしまうのです。
いくら自分が想い続けても恋叶うことがないことに、
いくら自分の想いが一途でも恋報われることがないことに、
そして、お姫様は思ったのです。
ああ、この恋、叶わないなら、いっそ――

iacta alea est.

色々なところに目をつぶれば彼女にしたい女ナンバーワン。学校内で天崎七月（あまさきしちがつ）はそういわれている。つまりはそういう人間なのだ。

満点のプロポーション。すらりと伸びた脚線美、腰まで届くつややかな緑髪。などなど。

上品に整った顔立ち。薄いくせにやけに血色がいい唇、はかなげな瞳にけぶる睫毛。エトセトラエトセトラ。

と、完璧すぎる外見的大和撫子セットに加え、成績優秀、運動神経抜群と、まさに才色兼備、文武両道、おまけにやさしいと文句なしのプロフを持つ彼女。しかしここまではあることに目をつぶればの話。まこと残念なことに天崎は夏ももう終わりだというのにブラウス一枚で上着を羽織るということをしない。しかもその裾はスカートの中に内包されるという恩恵を知らないようで常にシャツだし状態。聞いた話だと冬場もそれで過ごすらしいというのだから驚きをかくせないどころか脳がいかれているとしか思えない。それと彼女は上履きを履くという習慣がないらしく学校内ではつねに裸足。靴下も履かずに、ぺたぺたぺたぺたとリノリウム床と足裏との接着音、剥離音を交互に響かせて廊下を闊歩しいている。つまりはとてつもなくだらしない格好をしているということなのだが、それでも「ルックスとスタイルがいいから文句なし、可愛いは正義！」やら「何にも染まらない自分を持っているところがいい！」と、世の中、表層だけを掬っておいしいとこだけ頂くのが上手いらしく、欠点なんて何処吹く風な連中が多いのが現実だ。まあ、欠点を補って余りある魅力をもっていることも事実といえば事実だが。

そんななこんなで多くのファン層の支持を受けている彼女なのだが、しかし、

俺、木付奏間（きづきそうま）は天崎七月がワルモノであるということを知っている。

ワルモノ、悪者、もしくは悪人。「あなたはワルモノですか？」なんて街頭インタビューしたら、消極的で自虐的な日本人のことだ、広義の意味で捉えて自分のことを「悪者です」なんて答えてしまう人間が多いだろう。しかしその人に理由を尋ねてみると「嘘をついたことのない人間がいるんですか？」とか「生きてるだけで牛さん食べてるんですよ」とかとか「小学生の頃、駄菓子屋で万引きしたことあります」とか、まあ非常に面白みのない優等生発言が帰ってくるに違いない。しかし、こと天崎にいたっては話が違う。誰もが絶対的に悪者だと断定できる要素、すなわち彼女は犯罪者とカテゴライズされる人種なのだ。

そう、天崎七月は犯罪者である。

「木付さん、私に何か用ですか？」

いいかげん痺れを切らしたらしい、天崎は振り返って俺に話しかけてきた。一応クラスメイトで、俺も彼女も分け隔てなく接する人物ではあるが、特別親しいわけでもない。会話のきっかけは欲しくて、俺はわざとらしく下校する彼女の後をつけていたのだが。

そんな俺に対する当たり障りのない言葉選びはさすが優等生。及第点を挙げてつかわす。なんちって。

「いや、天崎さん、ストーキングしようと思って」

俺の言葉に表情を変えなかったのもさすがといったところか。学力が直接的な頭のよさに結びついてるとは思わないが、やはり天崎七月という人間は利口な部類に入るようだ。まあそっちのほうが俺もやりやすい。

「いつもみたいに須原（すばる）さんとは帰らないの？」

そこでなぜスバルの名前が出るんだ。と、落胆して膨れてみせたりはしない。たしかにはたから見て俺はスバルと親密にみえる行動を学校内でとっている。

「いや、それが喧嘩しちゃって……」

もちろん嘘。そういえば俺はスバルと喧嘩したことあったかな、たしか一回だけあったようななかったような……。

「だからってなんで私についてくるんですか？」
思っていたよりも風当たりがきついな。これはどうにかせねば、と、俺はわざとらしく顎に指を当てて考えるそぶりを天崎に見せる。
はあ、と、心の中で落胆。本当は最終手段だったのだが、しかたない。
「天崎って彼氏とかいるの？」
ギリギリ冗談に聞こえる範囲で、聡い彼女にはそれが一番真実味を帯びて聞こえるはずだから。
案の定、彼女は一瞬目を見開くと折り目正しく俺に向き直りペコリと頭を下げた。
「ごめんなさい。私好きな人がいます」
先読みして勘違いも甚だしい？　いや、天崎としては当然の話なんだろう。なんせ今まで彼女に近づいてきた男のほとんどが同じ質問をして同じような結末を辿ったのだから、ここが彼女の聡いところだ。遅かれ早かれこうなる運命ならハナから期待を持たせないほうが男のためになることを彼女は知っている。それを知ってて夢を見せてやるのはいわゆる悪女ってやつ。悪女路線もそれはそれで天崎の新たなファン層獲得に繋がるのだろうが……。そういう意味で純粋で一途といったところか。やれやれ。
まあ、今の俺の現状確認としては、偉大なる先人のおかげで天崎に告白する前にフラれたというわけだ。
と、ここまでは計算どおりだ。いや、負け惜しみとかではなく。
「では、そういうことで」
と、天崎は踵を返して帰途に戻ろうとする。まったく、男のフリ方をわきまえてるのが少し癪に障る。
当然のように俺は天崎の背中を俺は追う。
天崎は右肩から鞄を掛け、左手のみを振り子運動しつつ歩く。歩くスピードは俺が普段歩くスピードとほとんど変わらない。ということは女性にしては早いほうだろう。それとも俺がつけてるから早足なのかもしれない。いや、後者が有力か。学校内では裸足の天崎

も当然、舗装された道路を裸足で歩くという愚かな真似はしない。
といっても履いているのはなんの洒落っ気もないつっかけサンダルなのだが。ぺちぺちと足裏とサンダルの接触音を響かせながらリズム良く淀みなく天崎は歩を進める。まあ当然といえば当然だが、歩く行程でちらりと見えた廊下を素足で歩く足裏は真っ黒だった。
「なんでついてくるんですか？」
もともと気づいていたのだろうが、カーブミラーで俺の姿を捉えた天崎は振り返らずに言った。
天崎の右手が鞄のベルトを握り締める。いいお灸になればいいのだが。
「だから、天崎さんとス――」
「ついて来ないでください！」
言葉をさえぎり、天崎は俯き気味に叫んだ。そして、俺にリアクションを起こさせる暇を与えず走り去っていく。
はあ、と俺の口からは安堵か落胆かわからないため息が漏れる。
「ふられちったな」
ぽりぽり、と後頭部を指で掻いて俺は自分への小芝居は忘れない。
まあ、しかたない。今日はあきらめて次の機会にしよう。

まったく忘れていたが、どうも修学旅行なるものがあるらしい。
二週間後、木金土日の三泊四日で京都。どうやら授業数をぎりぎりまで確保するために事前準備は突貫作業で行うのが我が高校の伝統のようで、余裕の無いスケジュールのため毎年準備が終わらないクラスも出てくるらしいのだが、そこは学園のアイドル天崎七月、クラス委員として立派にクラス内をまとめあげて、ホテルの部屋割りと行動の班割りをあっという間に決めてしまった。
「誰か篭宮さんにプリントを届けてくれる人はいませんか？」
本日のノルマを達成した天崎が教壇上で最後のしめに入っている。
与えられた時間が大幅に余らせているが、担任の興梠（こおろぎ）さん（四十

八歳♂）の眠たそうな顔を見る限りこのまま放課の流れになりようなので、荷物をまとめてブレザーに袖を通す。鞄を担ごうとしたところで声がかかった。

「では、木付さんと加々見（かがみ）さん。修学旅行の手引書の提出期限は来週の月曜までなので、よろしくお願いします」

教壇上の天崎から窓際最後尾の俺の席までの超遠距離狙撃。

「お、おれ？」

奇襲攻撃に思わず、聞き返してしまう。

「はい、春に委員を決めるときに木付さんは欠席してましたので、加々見さんの情けで木付さんは修学旅行クラス委員になってます」

情けって……、言葉づかいはいやに丁寧なくせに、いつも言葉は選ばないよな、こいつ。

栞奈（かんな）も小さな親切大きなお世話だ。修学旅行の手引書ってあれだろ？　遠足のしおりみたいなやつ。

それとも、昨日のこともあるし、天崎から俺への当てつけか？

一応、事実確認とばかりに教室の中央あたりの自分の席に座っている栞奈の小さな背中を見つめる。

加々見栞奈、身長が伸びることを加味して大き目のサイズを買ったのは明らかに失敗だろうと思わせる、少しだぼついた制服を着こんだ小柄な少女は、保育園、幼稚園、小中高校と同じ学校で、かれこれ計十回も机を並べた世間一般でいう幼馴染というやつだ。そのよしみでなのだろう、春休み明けにごたごた何かとごたごたあって、休みがちなだった俺に気を使って、俺がクラスからのけ者にされないように同じ委員に推薦してくれたのだとは思うのだが、正直今回はありがた迷惑だ。

そんな思念を込めて見つめていると、振り返った栞奈と一瞬目が合って――反らされた。

なんだ？　その反応。今の栞奈の反応では天崎の言葉が真実かどうか判断しかねる。

視線を落とすと、そこにはスバルのニヤけ顔。女子に大そう人気

な端正な顔立ちが嫌味ったらしく歪められて、比較的ライトな悪意がひしひしと伝わってくる。
ああ、悟った。これは嘘じゃないっぽいな。
「了解、です」
とりあえずうなずくと、天崎は満足そうに目を細める。まあ、その表情がなんとも魅力的で、たぶんクラス男子の三分の一くらいが見惚れてた。
「では、先生、このまま放課でよろしいですか？」
天崎が問う。
興梠さんが腕組みしてパイプ椅子に腰を沈めたまま、まどろむように二度頷いたことで放課となった。
部活に備えて着替える者も帰宅後の勉強のために教科書類をまとめる者も、つかの間の別れのため、皆一様にあいさつを交わす。
些細な雑談を交えつつ行われるそれは、いくつも重なることでやがて雑音となり、教室内の静けさを奪った。
「ご愁傷」
そんな中、前の席に座るスバルからそんな言葉がかかった。喧騒の中に通すため、張り上げた声は若干上ずっていてコミカル。
開口一番それか。と、ご期待に添えて肩を落としてやると、スバルは意味深に口の端を歪ませた。
須原冬（すばるとう）。こいつとは中学のときからの付き合いになる。中性的な顔立ちは整っていて、女子に人気がある。と言われている。言われてるってのは俺がその事実に納得していないからである。別にひがみとかではなく、納得していないのは『女子にもてる』という事柄ではなく、『中性的で整った顔立ち』という部分。いや、これでも語弊があるな、『中性的で整った顔立ち』は俺も認めるが、スバルに人気があるのは顔立ちが整っているからというわけではなく、顔立ちだけでなくこいつの芸術家（アーティスト）気質が原因なんじゃないかと俺は考察する。まあ、こいつはこいつで天崎とは違ったカリスマ性を持ってるということだ。

俺との関係は……知り合い以上友人未満といったところにしておくか。
「でも加々見さんと二人きりってのはソーマ的にはおいしいんじゃないの？」
何言ってんだこいつ。と、俺はわざとらしく顔をしかめてみせる。
「正直ありがた迷惑だ」
二人きりとかそれこそ気まずいだろうが。なんせあいつは――
「悪かったわね」
「まじで感謝してます。栞奈さん」
振り向くまでもなく感じ取れた栞奈の殺気に、俺は素早く頭を下げた。というか音も立てずに背後に立たないでください栞奈さん。
どうでもいいことだが、俺が軽く頭を下げても、頭の位置は俺のほうが高いんだな、なんて失礼なことを思ってると、
栞奈は「そう……」と吐息のような頷きで返してきた。
雰囲気的に怒りが静まったみたいなので顔を上げると、
「じゃあ、今週末やるから、家に来ること」
結構上機嫌そうな横顔がそこにはあった。なぜに顔を反らす？
というか、
「え？」
唐突すぎて聞きこぼしてしまったのですが、
「なによ、家が嫌なら、あんたの部屋片付けておきなさいよ」
「そうじゃなくて、今週末？」
それに、俺の部屋には散らかるほどモノはありません。知っているでしょう？
「なにか問題でも？」
「いや、週末は予定が……」
「へえ、あんたでも予定あるんだ。も、もしかしてデート？」
「違う違う」
手を左右にぱたぱたと振りつつ否定。
別に俺は予定があるとは言ってないから嘘をついたことにはなら

んよな、正確には予定が入る予定。という話。
「そ、じゃあ、都合のいい日、考えておいて」
言って、栞奈は俺の目を見据えてくる。なかなか真剣な目つきに圧倒されて思わず目を反らしてしまったが、
「ああ、了解」
適当に返事をすると栞奈は満足したようで、踵を返した。そして、
「じゃあね、にらにゃんのお二人さん」
皮肉たっぷりに、嫌味たっぷりに俺たちにそう言い残して、教室の後ろのドアに消えていった。
「ふう」
なんか、緊張したな、計画の前に機嫌を損ねて変に刺激するのもあれだし。
演じるという行為はなかなかに集中力を要するらしい。
「なんだよ」
さっきからにやにやしやがってよ、スバル。
「いや、別に」
その顔になにか言いたいと書いてあるんだが？
「さて、俺たちも帰りますか」
俺の睨みをスルーするようにスバルは立ち上がった。
「あ、ごめん。今日用事ある」
「も、もしかしてデート？」
さっきの栞奈のモノマネか？　どもるとこまで再現しているが、まったく似てないな。
「違う違う」
手を左右にぱたぱたと振りつつ否定。
そして俺は少し駆け足で教室を出た。

どうも、今日は月が遠い。
昼間、閑静な住宅街は、夜になればそれはもう犯罪の巣みたいに

黒ずんでいて　実際に悪事を働きたい欲求に駆られるが、たいがい一過性のもので、少しの間衝動に耐えれば道を踏みはずすことなく波は収まる。そんなちっぽけな尿意に耐えつつ探し回ること二時間。ようやく発見。

どうやら、というか予想通り彼に首ったけらしく、こちらに気づく気配は微塵も感じさせない。

恐る恐る――なんて必要もなく電柱の脇にしゃがみ込む彼女に向って歩を進め、その横に俺もしゃがむ。そして至近距離からその横顔を覗き込む。

恋する乙女は美しい。

なんて、誰が言ったんでしょうね、見てください。俺の目の前の少女を、完全にゆるみきった表情で、よだれなんかたらしてますよ？　おまけに、その上下ネズミ色のスウェットで外を出歩くのってどうよ、つっかけサンダルはいつものこととして、まさか、私服はそれしか持ってないってことは……ありえそうだ。

風呂上がり――なんだろうな、かすかにシャンプーの香りが漂うその長い黒髪は濡れそぼっていて無秩序に彼女のまるめた背中に散乱していた。

もう、そろそろ、いいかな。

「こんばんは」

俺は意を決してその少女――天崎に声をかけた。

すると天崎は、びくぅっ、と肩を跳ね上がらして、持っていた双眼鏡を取り落とした。俺はそれを地面すれすれでキャッチする。高価そうな双眼鏡を俺のせいで傷モノになるのは嫌だし、何より音を出すとマズいからな。

ジャスト十二秒の石化の後、天崎はかくかくと首だけで俺のほうへ向いた。

「な、なんで……」

場をわきまえているのか、大声は出さないことには感謝。

なんでって、おいおい。

「言わなかったっけ？　俺、天崎さんとストーキングしようと思って」

――――――――This story continue to next story!

下を向いて歩こうよ

草木も眠る丑三つ時。

たとえ草木が眠ろうとも、人の営みは稼働しなくてはならず、大多数ではないもののそのシステムに組み込まれた者は、例え弱音や不平をもらしつつも、自分に課した、あるいは課せられた労働を社会に提供する。天崎七月がストーキングを行う対象の男性もそのシステムにあてはめられた少数派の人間らしく、必然、犯罪者天崎七月の活動時間は深夜帯に限られる。

ふっ、と世界が浮いたような錯覚を覚える。今日は月が遠い。いや、空が遠い。月明かりははかなげで街灯の少ない閑静な住宅街でもマイナス一等星以上の星々が散見できるだけだ。

そんな夜はまさに絶好の悪行日和といったところで、あいまいな暗さの夜道はいっそう犯罪を助長させる。

暗くても、いや暗がりだからこそ、よりいっそう大きく見える一対の瞳が二回、ゆっくりとまばたきをした。

俺は何か継ぐ言葉を探しているよう見えるよう――わざと困ったふうに頭を掻きながら――天崎を観察する。

氷が解けるように徐々に弛緩していく表情。ぎゅっっと握られた拳からも少しずつ力が抜けていくのが分かる。青白く、細長い手はよく見ると震えていて自らの感触を確かめるように何度か結んで開いてを繰り返している。そしてその手が――いきなり俺に襲いかかってきた。

天崎の願いを害している自覚が無いほど俺はバカじゃない。この状況で俺の存在は天崎にとって邪魔者以外の何物でもないのだ。なので当然天崎の報復行動も想定内。予想した最悪の展開回避のシナリオに則って、俺はしゃがんだままのバックステップで天崎から距離をとり、襲いかかる手から逃れる。

が、しかし、天崎の目的は俺への襲撃ではなかったらしく、天崎

の手は予想を大きくはずれて、俺の手の中にある双眼鏡を掴んだ。
「……」
「……」
一瞬の視線の交錯の後。ぷつんと双眼鏡を奪い取られた。
「帰ってください」
天崎は息を吐くように小さく言った。しかし、俺は無視、
「ずっと、双眼鏡覗いてると回りが見えなくて危ないよ？」
話を引っ張ろうと試みる。
「だ、だって顔がよく見えないじゃないですか！？」
出たな、本音がポロリ。
意外に簡単に釣れた。どうやら、天崎も人並みには動揺しているらしい。揺れ幅のベクトルが少々ズレている感が否めなくもないが。
「とりあえずよだれ拭いたほうがいいよ？」
言って、俺はポケットからシミ一つなく洗濯され、綺麗にたたまれた萌黄色のハンケチーフを取り出し、それを天崎に差し出す。
「ほっといてください」
しかし、天崎はそれを受け取らずスウェットの袖口で口元を豪快に拭いてしまうのであった。ねずみ色は滲んでさらに深い灰色になる。
「そのスウェットはやっぱり低視認性重視？」
「なに言ってますか、これは私の私服です」
嗚呼、今度は聞きたくなかった美少女の実態がポロリ。
はたしてこの事実が新たなファン層獲得に繋がるか否か。
「ストーカーは犯罪だよ」
ちょっと、早いかとも思ったが、ここまでなんだかんだで質問にはレスをつけてくれたので簡単な心理テクを利用して真理へと一歩踏み込む。
「わ、私はストーカーなんてしてません」
「あ、どもった」
うわ、すごい目で睨まれえた。

しかし、今日の俺は負けない。
「ストーカー規制法って知ってる？」
「知ってます。私はストーカーじゃありません」
ここらへんで、ちょっとイヂワルでもしとくか。
「でも、ストーカーしたって想いが叶うわけじゃないでしょ？」
お、唇を突き出して明らかに怒った。
「そんなことありません。ストーカーから恋人になった例も確かにあります」
「……」
この大和撫子さん情報管制最悪だな。（頭）大丈夫か？　本当に秀才なの？　それともバカなの？
てか、電柱の脇で男女二人が膝を抱えしゃがみ込んで小声で会話してるってかなりシュールな絵だよな。なんて考えてると、ようやく天崎は自分の失言に気付いたらしく、はっとしたような表情。少しおもしろくなってきた。
「あ、ちがっ、その、私は一般論とし……」
天崎の言葉はしりすぼみに消えてゆく。そのまま俯いて上目づかいに「う～」と唸る。
「とにかく、木付さんは帰ってください」
「つれないな、俺も天崎さんの仲間に入れて欲しいのに」
「仲間って、そもそも私は一人です」
一人ってことは仲間が存在しないから一人なわけで、つまり一人から二人に増えることに仲間が増えるって表現は適切でないってことかな？　細かいな。
「うん」
だから曖昧に頷く。一人、孤独な戦い。もちろん知ってる。
「だいたい、このことをどこで知ったんですか？」
「俺、天崎さんのファンだから、天崎さんのことならなんでも知ってるよ」
一女子高生である天崎本人の前でファン告白とかきもいな俺。天

崎もよくひかなかったな。
「それなら、ストーカーする相手を間違ってます」
「お、間接的に自分がストーカーって認めた？」
また睨まれた。すげー恐い。
「ごめんごめん。俺が天崎さんのファンってのは嘘だけど、力になりたい気持ちは本当だから」
零時を回っているので昨日の夕方ごろ、俺は天崎に告白まがいをしてフラれたことになっている。言葉の裏打ちができて信頼を得やすい……はず。
「だいたい木付さんが仲間になったとして私に何かメリットがあるんですか？」
「俺、天崎さんよりストーカー歴長いから、先輩の意見は大切だと思うよ？　いや、むしろストーカーのプロといっても過言ではないから俺」
へぇ、そんなことは初耳だ。よくもまあそんなにすらすらと嘘がつけるものだな、俺。
「へえ」
案の定、天崎の反応はライトだった。
あれ？　嘘だってバレてるっぽい？　ちょっと誇張しすぎたかな？
「他に特技といえば……体内時計が正確かな、三十分を誤差一秒以内で数えられるよ、それも他の作業をしながら、他のこと考えながらでも」
おおう、今度はスルーですか。
完全に興味が引く前にたたみかけないと、完璧に心を閉ざされてしまいそうだ。
うーむ、俺に何か、今の天崎の興味をひくようなスキルはあったかな……いや、あるんだな、これが。
「あ、そうだ！　俺、ピッキング上手いよ」
わざと今気付いたふうに言った俺の言葉に、天崎は目を見開いて、俺が告白したときと同じ顔をした。

あ、わかった。天崎っておどろくとそうゆう顔するんだ。
「本当ですか！？」
声が弾んでる。やはりこれは正解っぽい。
「さすがに見るからに厳重そうだったり、指紋認証とかカードキーとかはムリだけど、一般の、物理的なキーだったら三十分以内に開けられるよ」
切り札を最後までとっておいた甲斐があった。どうやら上手く天崎の興味を引けたらしい。
ちなみに体内時計の限界が三十分なのもこのピッキングスキルに由来する。三十分に以内に開かない鍵をはどんなに時間をかけても開かないし、三十分というのは発見から通報、警察の駆けつけまでの目安の時間でもある。
「聞いてる？　天崎さん」
天崎は俯いてなにやら病的にブツブツ呟いてらっしゃる。俺の説明は完全に聞いてなかったっぽいな。
「鍵があくってことは……、て、できるし、……これもあれも」
なにやら、ピッキングというワードを着火剤にして妄想が爆発しているようだ。
「またよだれたれてるよ」
おおう、聞く耳持たず。しかたなく再びポケットからハンカケチーフを出して、口元をごしごしと拭ってやる。
ああ、これは脳内から帰ってこれないパターンだな、
「……しかたない」
俺は右手と左手でじゃんけんを始めた。

ほんの数日前まではくそ暑かった記憶があるのに、今夜はやたらと冷える。季節の変わり目を感じさせる夜だった。
明日はもう少し着こんでこようと決意を固めつつ、腕の振りを大きくして寒さをしのぎひたすら一人じゃんけんを続けた。

ポイントは意識せず無心にグー、パー、チョキを採択すること、しかしそれだけでは退屈凌ぎにはならないので、その代わり集中して勝敗を数える。分間約５０回行われる勝敗をカウントするのは思いのほか集中する作業でいい暇つぶしになる。昔、他のことに集中しながら三十分をカウントする練習をしたときよくやったけな。

「……はっ」

右手ｖｓ左手は２７１勝２４１敗２２６分で右手が勝ち越し、時間にしてジャスト１４分。ようやく天崎は夢の世界からご帰還なさった。

「おかえり」

「あれ？　木付さん？」

天崎は口元をぬぐい、目元をこすり、あたりをきょろきょろと見渡す。ほんとうにしゃがみ込んだまま寝てて、今起きました。きみたいな反応。白昼夢ってやつ？　どこまで人間の斜め上を行くんだこの人。

「え？　あ、あれ？　今何時ですか？」

「ん～、二時三十四分」

俺は自慢の体内時計で瞬時に弾き出す。

「え！？」

天崎は素早く体を回転させると、俺が声をかけたときそうしていたように、電柱の陰から通りのほうを覗いた。

「どうしたの？」

まさかとは思うが、一応聞いとくケド。

「……」

なんか、振り返って睨まれた。天崎はそのまま立ち上がってすたすたと歩きだす。それはストーカー対象が去って行った方向ではなく……たしか天崎の自宅方向。

「木付さんのせいで今日は収穫なしです」

背中でそう捨て台詞を放つ。あきらかにふてくされたご様子で、口調はすねた子供みたいにとんがっていた。

もしかして、ストーキング対象がまだ居ると思ってたのかな？
話してただけでも結構時間喰ってたのに、加えて脳内トリップしてたのに。時間感覚が無いとかそういう問題じゃないぞ。
俺は、艶やかな黒髪が揺れる背中に問う。
「じゃあ、俺は明日もくるから」
どうせ振り返らないだろうから、しゃがんだひざに肘をついて、手のひらに頬を乗せて、俺は天崎に問う。指でなぞった口元は少しニヤけていた。
もちろん、いいよね？　なんて聞かない。
「……考えておきます」
少し立ち止まった後、そう言い残して、つっかけサンダルの音を夜の街に響かせながら天崎かけていった。

昨日……というか今日は天崎のおかげで帰りが三時過ぎだった。
それから調べごとがあったので結局朝日を拝んでからの就寝となってしまった。
さすがに人間二時間の睡眠では足りないらしく見事に寝坊。気がつけば八時半。あわてて飛び起きるのも癪なので、ゆっくりと支度していたが、それでも一限の授業開始には間に合いそうだ。こういうときばかりは家の近さに感謝感激である。
「っく」
くせで欠伸を噛み潰してしまうが、回りには人もいないのでそんな必要はなかったな、という後悔の二回り小さな感情を黙殺しつつ、朝のホームルームを欠席した言い訳を考える。
「……」
困った。なかなか良い言い訳が思い浮かばない。しかし、優等生ぶっている俺としてはないがしろにできない問題である。
担任の興梠（こおろぎ）さん場合、無難に体調が悪かったと報告するより、お

ちゃめな回答のほうが好感度が上がる気がする。あの人適当だから。
うーん。
考えながら、始業前の静かな廊下を一人歩く。我が校は進学校だからか、昼休みはともかく、休憩時間に騒ぐ奴らは少ない。俺のように受験リタイヤ組はともかく、受験が確実に視野に入ってきた二年のこの時期、だいたいの生徒は何かにとりつかれたように勉強に目覚めるのだ。教室内では教科書を開いてぎりぎりまで予習を行う生徒が多いため休憩時間は比較的静かだ。
しかし、それにしても、今日は異様に静かだ。静か過ぎる。自分の教室の前に来て改めて思う。予習と言っても友達と話し合いながら行う生徒もいるからここまで静かになることは、いつもならないのだが。
いや、違う。
俺は、自分の思い違いを正す。
この教室だけが、異様に静かだ。
周りの教室の音は変わらない。この教室だけ浮いたように音を発していない。
何があった？　ドアはぴしゃりと閉められているので中の様子はまったくうかがえない。実は俺はクラスの隠れたムードメーカーで俺がいないとユーモアが生まれない。とか？　ないない。でも移動教室とかではなかったと思うんだよな。
「……まあ」
開ければわかることだ。どうせ大したことないだろう。
教室の扉をスライドさせる。
そこに広がっていた光景は一見すると――そう、見るだけなら普段と変わりない風景だったのだが、普段の風景と無音状態のミスマッチさが逆に異様だった。
ほとんどの人間が数人のグループを作って、立つなり座るなりにしろ、お互いに顔を見合わせている。しかし言葉は発していない。その顔はだいたいがバツの悪そうな顔で、何か、一点を見ないよう

に努めいるふうに見えた。
その一点。そう、それは教壇上に立つ天崎七月を。
扉が開く音につられて、クラス中の視線が俺に集まった。数人は笑顔を向けてくれたので、こちらも笑顔を張り付けつつ手を挙げて答えた。
ふと、昨日、修学旅行の班を決めたときのように教壇の上に立った天崎と目が合った。夜遅くまでストーカー行為に励んでいたにも関わらずまったく疲れを見せないその双眸は一瞬横目で俺をとらえると、すぐに正面へ向き直った。
いったい教室でなにがあったのか？
窓際最後尾、俺の席に座る栞奈に手招きされた。
「どうした？」
近寄り俺は問う。小声で言ったつもりだったが静かな教室に俺の声はよく響いた。
『浅山さんの上履きが盗まれたんだって』
あらかじめ俺の到着を予測してたのか、栞奈はノートの切れ端で作ったカンペを見せてきた。
ふーん。なるほど。
浅山京香、クラスでもあんまり目立たない。いかにもってカンジの子だ。で、浅山さんが、人望の厚く能力がある天崎に相談。天崎は穏便に進めるべくまずはクラスを問いただしたってところか。
高校生にもなってイジメかよ、なんて思わない、言わない。それは俺の仕事じゃない。
俺の前の影が勢いよく立ちあがった。
「お前ら、高校生にもなっていじめかよ！」
さっきから前で小刻みに震えてたからそろそろかと思ったよ、スバル。というかお前はなぜに俺の前の席に座っていたんだ。そこは最近休みがちだけど、篭宮さんの席だぞ。
スバルの言葉で堰を切ったように教室内に言葉が流れ、クラスをざわめきで埋める。しかしそれらの言葉は直接天崎に飛んでくるこ

とはなく作られた数人グループの内輪での会話ってかんじだ。
「須原さん。静かにしてください」
天崎の注意が飛ぶ。
「でも」
しかし、スバルは席に着こうとしない。
イジメは濃厚な人間関係が抱えた重大な欠陥だ。特定の条件さえそろえば発生するし、それは不可避である。
俺は視界の端に自分の席で小さくなって申し訳なさそうに座る浅山さんを捉えた。まあ、実害は今回初めてみたいだし、連続的に続く兆候があるわけじゃないから本人の意識としてはそんなもんだろ、自分のことで皆を騒がしてしまって申し訳ない。みたいな心境。しかもこの談義自体ホームルーム後からと考えると三分も経ってないはずだし。
しかし、天崎がたかが靴隠しぐらいでここまでの行動にでるとは。
イジメはイジメられるほうに原因がある。そうとも、ささいなことにしろ必ず原因は被害者にあるはずだ。そうでなければ標的には選ばれないのだ。しかし、原因があるだけで被害者は悪くはない。その原因自体が加害者側の理屈で構成されているから原因イコール悪の式は成り立たない。
天崎はよかれと思ってこのことをクラスに持ちかけたのだろう。でもこういう正攻法はよくない。イジメが悪化するだけだ。話せば分かる。なんて天崎やスバルみたいな人気者の意見だ。俺はこういうやりかたを絶対に認めない。まあ、しかし、今回、天崎はそんな自分に救われたな。また天崎の株がまた上がってしまうが、もともと天井知らずに伸びてたものが今更少し増えたところでなにも変わるまい。
「おい、スバル落ち着け」
天崎に食い下がるスバルを羽交い絞めにしてズルズルと後ろに引き下がる。
「でも」

「でもじゃない」
少し凄んで黙らせる。それから篭宮さんの席に着かせて、俺は栞奈をどかせて自分の席に着いた。
肩にかかった重圧から逃れるように皆一様に内輪のひそひそ話に没頭しているので、俺たちのことを見ているのは栞奈くらいしかいない。
「ちょっと耳貸せ」
手招く人差し指で手招く。
「犯人分かったのか？」
真剣な表情でスバルは俺の顔を覗き込む。少し笑ってしまいそうだ。
「まあな、でもあぶりだすにはお前の力が必要だ」
俺たち二人、やってやれないことはない。って昔スバルが言ってたっけ。ああ恥ずかしい。しかし、実際やってやれないことは少ないはず。
スバルの耳に向けて犯人の名と注文を短く口にする。真剣だったスバルの口元が緩んだのがわかった。
「お前のアドリブ頼みだから――」
耳から口を離し、言いながら俺はスバルの肩を小突く。
「たのんだ」
「マカセロ」
親指を立てるとスバルは立ち上がって教室の前に出た。
さっそく俺はポケットからケータイを出すと、カメラを起動する。連射モードに変えていると空いた前の席に栞奈が座ってきた。
「なにするの？」
さっき首根っこをつかんでおざなりにどかしたからか、若干不機嫌。
「見てれば分かるって」
「そう……」栞奈は吐息のように頷くと机に頬づえをつく。「なんでカメラ構えてるの？」

頬づえついてるから顔と顔が近い。
「ん？　小遣い稼ぎ」
あ、そういえば。
「なあ、栞奈」
「栞奈ってい呼ばないで」
「ごめんなさい」
間髪入れずにツッコまれた。なんか最近名前の呼び捨てに妙につっかかってくる。修学旅行委員のことで訊きたいことがあったのだが……まあ、いいや。今はこっちのほうが大事だ
「注目！」
スバルが手を挙げて聴衆の目を引いた。ベタだが掴みは十分だ。
クラス中がスバルの方へと目を向ける中、俺は天崎に向かってカメラをフォーカスする。
「ごめん！　さっきはおれも熱くなりすぎた」スバルは天崎に頭を下げたあと、教室中に向かってもう一度頭を下げる。「でもやっぱりいじめはよくないと思うんだ」
スバルは冗談めかして芝居がかった口調で声たからかに宣言した。あまりに唐突な意見に聴衆は「また始まったか」みたいな顔をしてあきれて、教室に立ちこめていた空気が一気に緩んだ。
イタい。観ててイタい。もしかしてスバルのおもしろムービーの方がおいしいんじゃないかと思ったが、男（ヤロー）じゃ金にならないので考えを振り切った。そもそも俺の指示で動いてくれてるのに笑いものにするのはバツが悪い。成功報酬分はキッチリ働かねば。と、アンニュイな決意を固めつつ俺は天崎にカメラを向ける。皆スバルの方を見ているので誰も俺の奇行には気付かない。
「さっきからなんですか？　須原さん。ふざけるのはやめてください」
今度は視線が天崎に注がれる。教卓に手をついて身を乗り出して、あきらかにイラついている。一年と半年弱天崎とは学校生活を共にしてきたがこんな天崎を観るのは初めてだ。

しかし、スバルは構わずに続ける。
「でも！　でもでも！　やむを得ずイジメという手段に走ってしまうこともあると思うんだ。例えば、故意ではなく無意識に人を傷つけてたとか、他人をいじめないと自分がいじめられるから保身のためにやったとか、それとその人が好きだから、愛するが故に傷つけてしまう。とか、ほらあるじゃん？　好きな子をいじめちゃうみたいな、その延長線上で愛ゆえに愛があるからこそ愛のためにその人を傷つけてしまう。傷つけるということは決してその人のことを嫌ってるからやるだけじゃないと思うんだ」
スバルの言葉に天崎は眉を寄せる。
口から出まかせにしろ、本人の中に確固たる持論があるにしろ、スバルの意見はいつも興味深い。それは俺の贔屓目……ではないと思う。
「そこで、天崎さん！　おれからの提案なんだけど……」
反論のすきを与えず。スバルは追撃を仕掛ける。距離も一歩縮めて天崎の目を見据える。
「なんですか？」
対する天崎はスバルに対する嫌悪を隠しもせず、表情の全面に押し出していた。
「犯人をさ、教えてあげるから、その人のこと見逃してくれないかな？」
「なっ」天崎は開きかけた口を噤む。「わかりました」
ダウト。俺にはその言葉が嘘だと分かる。
しかし、ここではそれこそがスバルの狙い。
スバルは「ふふん」と鼻で調子をとると、天崎の居る教壇の周りをぐるりと半周回る。そして、まったく動じない天崎の正面まで戻ってくると
「天崎さん。足元見てみて」
言いながらスバルはストンと天崎の足元を指差した。
天崎の視線もつられるように下に落ち、首が曲がる。

「……っ！」
ぶわっ、と一気に天崎の顔が真っ赤に染まる。。
両手で顔を覆うと、前髪をくしゃっとかき乱す。
そして、しゃがみ込んでしまう。
皆、訳が分からず静まりかえる教室に無情に切られた電子的なシャッター音だけが響いた。

「今日は、木付さんのせいで恥をかきました」
某ストーカー御用達電柱の裏に隠れた天崎はこちらを見ようともせず電柱の影から通りを覗き見つつ口を開いた。
今回の件は俺のせいになるのか？　……まあ、俺のせいになるよな。こっそり伝える方法もあったのに、写真欲しさにあえて公衆の面前で辱めたわけだから……しかし、今日の俺は無駄に果敢に食い下がる。
「え？　ごめん、俺なんか耳が遠くなったみたい。『スバルのせいで』の間違いだよね？」
「バレてないと思ってます？」
バレてるわな。ちなみに写真は昼休みに写真部に高く売り渡しました。
「思ってないです……」
「どうして分かったんですか？　私が、浅山さんの上履きを履いてるって、木付さんが入ってきた位置からじゃ教壇のの陰で私の足元は見えないですよね？」
「ああ、それはね……”天崎”と”浅山”で出席番号が隣だから」
「……それだけですか？」
「栞奈から事情を聴いたとき最初にピンときたんだよ、ああ、これ椅子取りゲームして椅子が足りないみたいな状況みたいだな。って、で、足音をよく訊いたらいつものぺちぺちって音じゃなかったから

……天崎が下駄箱の隣から上履き取ってきたなって確信した」
ここで注目すべき点は、天崎の中では上履きを履くことが、常識であるということだ。昨夜の一件、俺との接触で天崎は人並み以上に動揺していた。そして、動揺しているとき、心や思考に余裕がないとき、人はどんな行動をとるか、正解は普段慣れた行動を取る。だ。つまり天崎は動揺して思考に余裕がなかったために意識しないで普段どおりの行動をとったから、上履きを履いてしまったことになる。このことがはたして何を意味するのか……。
周りも天崎が余りにもナチュラルに上履きを履かないもんだったから、みんな気付かなかったんだろうな、今まで違和感があったものが普通に戻って、妙に日常風景に融け込んでしまったのだろう。
「でも、こっそり伝えてくれてもよかったじゃないですか」
天崎が背中越しにでもわかるくらいにいじけた声をだしてくる。
「ごめんごめん」別に天崎が見てるわけじゃないけど俯いて少し反省。しかし今日は無駄に（以下略）「だけど、確かに入れ知恵したのは俺だけど、俺一人じゃ実行しなかったわけだし、責任はスバルと折半じゃない？」
「その理屈で言ったら、須原さんは木付さんがいなければ悪事は働かなかったじゃないですか」
まあよく痛いところをついてくるもので、
「そうだけど……」
屈服するしかなかった。無駄に食い下がったのがあだになった。
俺が言葉尻を濁したせいで必然、二人の間に沈黙が生まれる。
身を寄せ合うように植え込みに住まう住宅街の貴重な緑が風に揺られて不気味にざわめく。空は今にも降り出しそうだが決して降り出さないという微妙なバランスを保った曇り模様で、太陽の恩恵を受けたお月さまの恩恵は受けられなかった。かといって街の光量が減少するということなく。電灯という文明の力に感謝感激雨嵐だ。
「……二人とも仲いいですよね……」
沈黙を戸を静かに押し広げるように天崎は言った。

「え？　二人って？」
まさかとは思うが……。
「木付さんと須原さんですよ」
背筋に寒気が走った。
「……ただの腐れ縁だよ」
「『にらにゃん』ってなんですか？」
天崎からの問いかけが続く。ちょっとは俺に興味を持ってくれたってことかな？　しかし、
「……どこで聞いたの？」
「有名ですよ？　加々見さんもよく言ってますし」
声の調子からして、少し頭を下げたのは微笑んだからだろうか、背中からは天崎の表情は読み取れない。
「企業秘密だ」
どうせ顔が見えないのだから、声だけを繕って、冗談めかして言う。少し揺らいだ心を隠すために。
すると天崎は振り返り、こちらを向いて、
「にらにゃんってなんですか？」
小首を傾けながら、もう一度言った。
とってよほど気になることだったのか、天崎は真摯に俺を見つめる。しゃがんでいる天崎が立っている俺を見つめると、必然上目づかいとなって、その瞳は、好奇心を隠しきれない子供のように澄んでいて……なんだか隠しごとをしているのがばからしく思えてしまった。
そのまま見つめていたら吸い込まれそうだったので、顔を反らし、雑念を払うように無造作に後頭部を掻く。それから、何故か言葉が口から吐いて出た。
「昔、お世話になった人がいて、その人が俺たちに言ったんだよ、普通群れるはずの動物が一匹で居て、珍しい状態を一匹狼って言うから、普段群れない動物が珍しく二匹でいる様は二匹野良猫で『にらにゃん』にしよう。野良猫はのらにゃんだから『にらにゃん』に

しよう。って。で、俺とスバルの二人は群れないタイプが二人いつもいたから、その『にらにゃん』なんだと」
うわ、なんか素のテンションのとき一人語るのってハズカシイな。
「たしかに、二人とも一人で居るイメージが強いですね」
そう感想を言った天崎はなんだか嬉しそうに微笑んだ。
「うそうそ、たしかにスバルは人気者ではあるけど周りから浮くっていう典型的な野良猫タイプだけど、俺は没個性の社交的な人間じゃない？」
「そうですか？　木付さんはたしかに外面（そとづら）はいいですけど、本音で喋ってない気がします。そういうところが私嫌いです」
「うわぁ」
嫌い。と言う割には言葉に毒が感じられない。
魅力的な笑顔のまま嫌いと言われては、返す言葉が見つからず感嘆ともつかない呻きをあげるしかなかった。
「……木付さんはその人のこと好きだったんですか？」
ふわっと天崎は柔らかく、俺に問う。あまりにも発言が自然すぎたので、返事に一瞬の沈黙を挟んでしまう。
「……ああ！？　どうしてそうなる」
「だって、顔赤いですよ？」
また、天崎はうれしそうに、くすくす笑う。
「それは……」一人語って恥ずかしくなったなんて言っても信じてくれまい。結果として口をつぐむことになった。
「木付さん可愛いです……」またはにかむように言ってから、すっと、天崎の顔から笑顔が引いていく。今までの質問が前座だったように、真剣そのものの表情で天崎は俺に問う。「……そんな木付さんなら、私の気持ち分かりますよね？」
「ストーキングのこと？」
返す俺の口調も合わせて、真剣味を聞きとれるようにチューニングする。
「ストーカーじゃないです」

冷えた、熱のない、けれども入り込む隙間のない声で天崎は言った。
「……その、天崎さんが好きな人と天崎さんが靴を履かないことに関係はあるの？」
なんてことはない。そう思ったのはただの勘。
天崎は躊躇うことなく静かに頷いた。
「私、小学生、三年生のとき、イジメられてたんですよ」俺が促すまでもなく天崎は一人語る。その姿に恥じ入る様子は見受けられない。「靴を履かなくなったのはそれからです。よく隠されて、ある日校庭で私の靴が燃やされて……ああ、じゃあ履かなきゃいいやって……」つまり、天崎が上履きを履かなくなってから八年近くたったことになる。それほどまでに幼少期の習慣というものは強烈なのだろう。
「ごめんなさい。こんな話聞きたくないでよね」
そう言って、天崎ははにかんでみせる。しかし、
「ダウト」
「？」
今日、天崎は俺にいくつかの質問を投げかけてきた。天崎から俺に歩みよろうとしてくれたのだ。だから、俺は天崎が踏み込めない一歩を代わりに詰めてやる。
「なんでもない。あやまることなんてないから。続けて」
今回は真剣を装ったわけではない。心から、その台詞が出てきた。
「まあよくある話しで、当時六年生だった……あの人、明信（あきのぶ）さんが助けてくれたんです」想い人を語る少女の頬は少し赤く、「はじめは、小さい頃にありがちな恋に恋するただの憧れの感情だったんですけど、年を重ねるにつれ……その、どんどん好きになっていって……」
「天崎にとって白馬の王子様なんだな」
「恋のきっかけなんて単純なものなんですよ」
「別に、天崎の理由が単純なんて言ってないけど、まあ……そうか

もな」自分を救ってくれた人。その存在はたしかに……大きい。でも、でも「でも、天崎。どんなに、その憧れの人の存在が大きくてもストーカーまでしようなんて一人じゃ思わなかったはずだ。今朝の俺とスバルみたいに、きっかけとなるものがあったはずだろ？」

両肩を掴み、詰め寄る。目を見て、決して逸らさず、天崎の心に訴えかける。

「そ、それは……」

天崎は詰問から逃れるように視線を落とす。その先にあった腕時計を視界に捉えると、少し強めに俺の手をはたいて拘束から逃れ、

「そろそろ時間です。静かにしてください」

そう言って、電柱裏の定位置に戻ってしまった。

――――――――――――This story continue to next story!

付きまとおうよ

元島明信（もとじまあきのぶ）。二十歳（はたち）。私立大学の経済学部二年生。大学進学時、父親の転勤が決まり、通学のために一人地元に残る。現在はアパートで一人暮らし。性格は温厚。御近所付き合いもよく。際立った噂や、目立つ取得はなし。極みつけはこの顔写真。

「……意外と冴えないな……」

これは全国の男子代表としては喜ぶべきなのか悲しむべきなのか……。

ど素人が容易にストーキングできるだけあって、天崎の想い人の周辺を調べるのは造作もなかった。

学校のアイドル天崎がゾッコンなあたり、さしずめ素敵な人だろうと勝手にあたりをつけていたのだが……第一印象はとくにこれといったものがない人物だった。

ただただ優しい。と誰もが評価する。それが彼の唯一の特徴。今回はこの点に付け込んで攻めていこうと思う。

「落としましたよ？」

背後から声がかかる。

振り返ると先ほどの写真の人物――元島明信がいた。

偶然？　いやいや。

元島が通る時間を見計らって自販機で缶ジュースを買い。ポケットに財布を入れるフリをしてわざと落としたのだ。

ファーストコンタクトの印象もいたって普通。声に特徴があるわけでもないし、ましてや行動も予想のラインを安全に下回る。ここでサイフを持って逃走しようものならアプローチを変えなければいけなかったのだが、どうやらその必要はなさそうだ。

「え！？　あ、はい！　ありがとうございます」

驚きを装いつつ振り返る。あわてて、プルタブにかけた指をひいて缶を開けてしまうという演技も忘れない。

「いえ」
と、元島は笑顔を浮かべたまま財布を渡してくれた。
缶を右手の小指と手のひらで挟み、財布を両手で受け取ると、中から一万円札を抜き取り、両手で元島に差し出す。
「ありがとうございます。これは……その、謝礼です」
「はは、いいですよ、謝礼なんて……それにこんなにたくさん。みたところ学生さんでしょう？　こういうのは自分のために使ってください」
手を胸の前ぶんぶんふって拒否されてしまった。
「でも、法律では落とした財布の謝礼は五パーセントから二十パーセントと決まっているので……」
もちろん、もしもの為に財布の中にはこの一万円札しか入っていないのだが、額が多ければ多いほど、元島が断る可能性が大きくなる。リサーチした性格からすればたとえ百円であっても受け取らなそうな男ではあるが、念には念を入れて、だ。
「困ったなあ」
頑なな態度をとり続ける俺に、元島は困ったように後ろ頭を掻いて、あたりを見渡す。
人通りの少ない場所と時間を選んだので、周囲には通行人はいない。
「これは俺の気持ちの問題なんで、もらってください！」
頭を下げて、元島の胸に一万円札を突き付ける。
「いや、よしてください」
元島がその俺の手を、ぐいと押し返す。その時だった。
「あ！」
どちらが声を発したかは言うまでもない。
俺の持っていた缶が傾き、中から内容物が毀れたのだ。俺に向かって。
右胸から右の太ももにかけてオレンジジュースが濃いシミをつくる。

「あの、すみません」
元島はあわてた様子でポケットからハンカチを取り出して、俺の洋服をぬぐってくれた。
「いえ、もともといえば俺が悪いんで……」
手で制すと、元島は距離を置いて、俯いた。
俺は缶を地面に置き、一万円を財布の中にしまうと、鞄から自前のミニタオルを出して自分の体を拭き始めた。
「……」
「……」
上目に確認すると、元島はものすごくすまなそうな顔をしていた。
「あの……」
じわりと同情を誘うような口調。覇気のない言葉で、心底申し訳なさそうに、元島は口を開いた。
「は、はい！」
あわてた風を装い返事をする。
「僕の家、この近くなんです。そのままだと……あれなんで、一旦来ませんか？」
「いいんですか？」
心の中でガッツポーズ……なんてしない。ことは俺の思うままに進んでいた。

通された部屋は、まあ、これも予想のラインを安全に下回る部屋だった。
外観から見るに築十年以内の二階建てアパート。その二階。外観のモダンでシンプルな感じもさることながら、内装もこぢんまりとしたものだった。なにより、物が少ない。八畳一間の１Ｋの部屋にはノートパソコンが乗せられたデスクとパイプベッド、それとベッド下の収納くらいしか物が見当たらない。食事のための机すらないのはきっとカウンターキッチンのカウンター部で食事を摂るからで

あろう。
と、対象の性格判断も兼ねて部屋の中をまじまじと観察していると。
「同じくらいの背丈だからたぶん大丈夫だよね。えっと、下着は新品だから安心して」
と言って、ベッド下の収納から、服を出してわたしてくれた。トランクスはまだ開封されてないものだった。
にこっ、と屈託のない、心からの笑みを元島は浮かべる。
対する俺もにこっ、と誰にもそうとわからない作り笑いをする。
やべーナイススマイルだ俺。やっぱり取り繕うこととか欺くこととかが得意だなーって思考を整理して自己保身に走ってみたけど、だめだ。目の前の笑顔が俺の罪悪感を浮き彫りにしてくる。
なんだろう。すごい言い人だなー。
没個性なんて言ってごめんなさい。これからは元島さんと呼ばせていただきます。
「申し訳ないです。ありがとうございます」
服を受け取って、平身低頭したくなった。
「いいっていいって、ジュース零したのは僕のせいだし……ほら、早く風呂入っちゃいなって」
ちなみに、アパートまでの道のりで元島さんとは十分に打ち解けた。
といっても俺が画策したプランを奮うまでもなく、元島さんは俺にいくつかの質問をして、そこから会話を広げてくれた。喋り方や、話を聞いているときの態度から彼の人の良さがひしひしと伝わってきて……って、あぶないあぶない。あやうく彼の人柄に籠絡されるところだった。ここにきた本来の目的を忘れてはいけない。
でも……、一つだけわかった気がする。天崎が惚れた理由と、彼の強さ。でもこの情報でけでは今後戦っていけない。
シャワーを終えて服を着替えると、元島さんが新しいジュースを用意して待っていてくれた。道中、必死に断ったのだが、元島さん

が買ってくれたのだ。
「ほら、奏間くん。そこに座って、遠慮しないで飲んで」
「はは、ありがとうございます」
苦笑いしつつ、缶ジュースを受け取り、指定されたデスクチェアに腰かける。プルタブをひねり「ありがとうございます」と礼を述べてから口をつけた。
それを見てから元島さんも、自分用に買ってきたコーラに口をつける。
嚥下する間。二人の間に沈黙が生まれるがまったく居心地が悪いという感じはない。むしろ気持ちいいくらいだ。
「……どうする？　一応服は洗濯したけど、乾くまで待ってる？　それとも、そのまま帰る？」
「あ、今日はこのまま帰らせてもらってもいいですか？　服は後日洗って返します」
元島さんはやわらかく微笑んで、コーラを一気に飲み干す。ベッドから立ち上がりキッチンへ入ると、流しに缶を置き、冷蔵庫を開きながら訪ねた。
「なんか、食べる？　といってもたいしたものはないんだけど……それとも夕飯食べてく？」「ありがとうございます。でも用事があるので、今日は洗濯が終わり次第帰らせてもらいます」
「そっか……」元島さんは少し残念そうな口調で言うと、冷蔵庫を閉めた「そいえば、奏間くんは高校生？　だよね」
「ああ、はい。今二年生です。駅の向こうの高校に通ってます」
会話のイニシアティブが完全に元島さんにあるが、この会話の広がりなら泳がせてもよさそうだ。
「おお、じゃあ勉強できるんだ。羨ましいなー」
「いえいえ、そんなんじゃないですよ」
たしかに勉強はできた。しかし、進学校に入って、偏差値の高い大学に入るために大学に入ったわけではない。
「駅の向こうの学校……っていうと僕の知り合いも今、一人通って

るんだ」
「知り合い……ですか……」
元島さんの知り合いといえば……いや、ポジティブに考え過ぎか？　天崎自身、ほとんど喋ったことがないみたいなこと言ってたし。
「知り合いって言うのかな？　小学校の後輩でね、昔から家が近かったんだ。七月ちゃんっていうんだけど……聞いたことある？」
「……っ」
驚いて、肺から抜けた息が喉を震わせないように必死に耐えた。
まさか、憶えてる？
「すごい、可愛い子だったから印象的だったんだけど……今ごろはきっと綺麗になってるんだろうな」
過去に想いを馳せるようにすこし顎をあげて語る元島さんの言葉には内容にそぐわずまったくいやらしさが感じられない。
しかし……まさかの事態だ。元島さんは天崎のことを憶えている。しかも可愛いとまで言った。天崎に聞かせたらどんな顔するだろうか、意外とテンパり症だから、また顔を赤くしてうずくまってしまうかもしてない。
「天崎さんですよね、すごい美人なんで、学校中で有名ですよ」
まあ、美人だからってだけではないけど……。
「そっか、やっぱり目立つ子だったもんな」
「けっこう交流があったんですか？　天崎さんと」
まあ、ここは踏み込んでも何も違和感はないだろう。会話として自然な流れだ。
元島さんは再びベッドに腰をおろしてから口を開いた。
「ううん。僕が六年生のとき、七月ちゃんが三年生のときにちょっとしたきっかけで知り合って、ちゃんと喋ったのはその一度だけ。そのあとすぐに卒業しちゃったから、でも家が近かったみたいでよく道ですれ違ったりしてたんだけど、何故か睨まれるんだよね、あいさつしても返事してくれないし、もしかして嫌われてるのかな？」
言い終わって「はは」とお互いに苦笑いでコンタクトをとる。

天崎のやつ、きっと緊張して動けなかったんだな、たぶん。真相は今夜聞いてみよう。
「学校でも特に愛想がいいほうではないみたいですよ」
「そうなんだ……でも、たぶん僕は嫌われてるんだと思うよ」
言いながら口調と共に肩をがっくり落とす。
おいおい、ポジティブに行こうよ。
「どうしてですか？」
「その、詳しくは言えないんだけど、僕と七月ちゃんが知り合ったきっかけがさ、七月ちゃんにとって、あんまりいい思い出じゃないから、きっと僕のことを見ると嫌な記憶がよみがえるんだと思う……」
いやいや、当人は真逆の反応をしてますよ。と言えたらどんなに楽なんだろうか。
「そんなんですか……」
「最近は見かけないけど、七月ちゃんは元気にしてるのかな」
毎日のように、半径十メートル以内の距離に入っているのだが……ストーカーとは悲しい生き物だな。
「ええ、この間は全校集会でスピーチしてましたよ」
「よかった。学校にちゃんと行けてるんだ」
元島さんは心底安心しきったような顔をした。
きっと天崎のいじめられた過去をしっている者として、彼女が学校にちゃんと通えているのか心配だったのだろう。本当に優しい人なんだな。
それから、俺と元島さんと、探りを入れつつであったが他愛のない話をした。そうして何分ぐらいたっただろうか、洗濯が終わった服は袋に入れて渡してくれた。
「ごめんね、ウチの洗濯機、乾燥までしても生乾きなんだ」
「いえいえ、こちらこそご迷惑をかけて申し訳ないです」
「奏間くんとは気が合うみたいだから、よかったらまた来てよ」
正直、俺も気が合うと思った。スバルとは気がねなく話ができる

が、気が合うと言うには俺たちの価値観が離れすぎている。そういう意味で元島さんは俺にとって、初めてといってもいい気が合う人だった。

「もちろん。必ずこの服を返しにきますよ」

俺は自分の着ている服をつまんで笑う。笑ってみせるのではなく。自然と笑える相手は貴重だ。元島さんも応えて笑顔で返してくれた。二人の仲は、空っぽではあるが、この程度の軽口を言えるほどには進展していた。しかし、また来れる。という打算が捨てきれない現実に少し悲しくなる。

「じゃあ――」また来ます。とドアノブに手を掛けて言おうとしたそのとき、俺が力を加えることもなく、ドアが勝手に開いた。がちゃりと音を立てて、

強い西日が玄関に差し込み、思わず目を細める。だんたんと目が慣れてきて、表からドアを開けた人物の輪郭がはっきりとしてくる。俺の目の前――開いたドアの向こうに立っていたのは、小柄な女性だった。

「ごめん明信。土曜日だけど来ちゃった」

天崎とは違い、丸みを帯びた体型。決して太っているわけではなく女性的な美しさを感じさせる。くりっとした瞳を筆頭とする愛らしい顔つきは人生経験に基づく直感が年上だと判断しているのに可愛いと表現してしまいたくなる。

その女性は俺の姿を捉えると、大きい瞳をさらに大きく丸め、元島さんと俺をいったりきたり見つめた。

「どちらさま？」

その問いは元島さんに向けて、まあ当然の反応。

「ああ、こちら木付奏間くん。さっきちょっとしたきっかけで知り合って思わず意気投合しちゃった俺の新しい友人」

包み隠さず。取り繕うふうもなく元島さんは普通に俺を紹介してくれた。

「まさか、友達の少ない明信に新しい友達ができるなんて……」

まじまじと観察された。少し照れる。
そこで、俺の視線に気づいたのか、元島さんは、
「あ、ごめん。こっちは間中沙良（まなかさら）、僕の――」
その後の言葉はできれば聞きたくなかった。
「彼女」
彼女って……おいおい。

――――――――――This story continue to next story!

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8063p/

にらにゃん

2011年5月31日01時10分発行